



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

安倍元首相の国葬に思ふ

―世論の「分断」と報じられて悔しい―

國武忠彦

安倍晋三元首相の国葬が、九月二十七日に行はれた。私も感謝の言葉を一言のべてお別れしたく北の丸公園に向った。地下鉄の駅を出て驚いた。参列者の列が長く続いてゐて人で一杯なのだ。いつ献花できるのか。みんな黙って静かに動きだすのを待ってゐる。警備の人に聞くと「二、三時間はかかるでせう」といふ。私も最後に並んだ。すれ違ふ友に会った。「うれしいね」と声をかけたら、「うん」といった。

会場に着いた遺骨は悲しみに沈んだ昭恵夫人から岸田首相に渡された。首相は遺影を見上げながら追悼の言葉を捧げた。先づ不慮の死を悼み、次に我が国の安全保障、外交、経済、教育についての具体的な事蹟を挙げて、「あなたが敷いた土台の上に、持続的で、すべての人が輝く包摂的な日本を、地域を、世界をつくっていくことを誓い」ますと述べた。

追悼の言葉
帰りの電車で疲れて眠ってしまった。帰宅してテレビをつけて、国葬儀の様子を観た。遺骨を載せた車が、自宅から会場に向ふ途中に立ち寄ったのは、自衛隊員が整列した防衛省前だった。日ごろの任務遂行に感謝し、今後もよろしくと別れの挨拶をしたのだ。

菅前首相の弔辞も、先づ不慮の死に触れた。「信じられない一報を耳にし、とにかく一命をとりとめてほしい。あなたにお目にかかりたい」と思ったといふ、友人としての率直な悲しみの言葉から始まり、「国難を突破し、強い日本を創る。そして真の平和国家日本を希求し、日本をあらゆる分野で世界に貢献できる国にする。そんな

な覚悟と、決断の毎日が続く。七年八カ月、私は本当に幸せでした」と述べた。そして、「あなたは常に笑顔を絶やさなかった。いつもまわりの人たちに心を配り、優しさを降り注いだ」と述べたと、私は何とも言へぬ悲しみが胸に広がるのを感じた。

三つの感謝

私の安倍元首相への感謝の言葉は三つある。一つは、教育基本法の改正である。「伝統と文化を尊重し：我が国と郷土を愛する」。このたった一言を盛り込むために、いかに努力されたことか。二つ目は、安倍談話である。保守派からも多くの懸念が表明されたが、私は首相の苦しい思ひに共感を覚えた。先の大戦への痛切な反省とこれからの国際社会への貢献を述べて、「謙虚な気持ちで過去を受け継ぎ、未来へ引き渡す責任がある」と言った。謝罪の歴史を終らせたいとの苦しい決断だったのだ。三つ目は、安全保障関連法を成立させて、集団的自衛権の行使を限定的に可能にしたことである。そして、憲法改正への実現可能な道筋をつくったことである。「9条1項(戦争放棄)、2項(戦力不保持)を残しつつ、自衛隊を明文で書き込む」といふ方向を示し

た。自衛隊の存在を憲法に位置付けて、自分の国は自分で守る意志を明確にすべしとした。以上の三つは、戦後日本の長年の基本的な課題だった。将来の日本の発展のためには、一日も早く解決しなければならなかった。どれも難題ばかりで、野党の激しい反対にあったが、安倍元首相はひるまずに立ち向はれた。

問はれる「引継ぐ意志」

国葬の会場に、立憲民主党の野田佳彦総理の姿があった。安倍元首相とは、政策で激しく戦った人である。立憲民主党が国葬に反対する中での出席である。非業の死を遂げた政敵の死を悲しむ「もののははれ」を知る「よき人」だと私は思った。

国葬は終わった。夜から翌日にかけてのテレビには、「国葬反対」「アベ政治を許さない」といふ抗議デモや集会ばかりが目についたが、海外のメディアは安倍氏の国際的貢献に果した指導力を高く評価した。しかし、その一方で国内の世論は「分断」したと報じた。悔しかった。問題は、安倍氏の果せなかつた課題を、私たちが引継ぐ意志があるのかどうか問はれてゐることだと思ふ。
(昭和音楽大学名誉教授)